

源氏物語への招待



定価2200円(本体2136円)

ISBN4-09-387085-3 C0093 P2200E

今井源衛

源氏物語への招待

学院図書館
書章

今井源衛（いまい げんえ）

1919年、三重県生まれ。1947年、東京大学国文科卒業。平安文学専攻。現在、梅光女学院大学教授、九州大学名誉教授。著書、『源氏物語研究』、『王朝文学の研究』、『紫式部』、『花山院の生涯』、『源氏物語』6巻（日本古典文学全集・共著）、『源氏物語』10巻（完訳日本の古典・共著）など。

装幀 舟橋菊男

源氏物語への招待

1992年4月1日 初版第1刷発行

© Gene Imai 1992

— 検印廃止 —

著 者 今 井 源 衛

発行者 相 賀 徹 夫

発行所 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 東京 (03) 3230-5122

業務 " (03) 3230-5333

販売 " (03) 3230-5739

振替 東京 8-200番

印刷所 凸版印刷株式会社

Printed in Japan

- ・ 造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、業務部までお送り下さい。送料小社負担にておとりかえいたします。
- ・ 本書の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

ISBN 4-09-387085-3

源氏物語への招待

目次

源氏物語の世界

はじめに	7
あらすじ	10
物語の伝統	16
主題と構想	22
主人公、光源氏	30
源氏物語の表現	38
紫式部の生涯	50

源氏物語を探る

一 物語の時代設定	75
延喜・天曆准拠説の由来	
准拠の実体	
時代設定の二重性	
皇統の問題	
二 ユーモアの諸相	92

女のユーモア 未摘花 失敗と皮肉と 近江の君と内大臣

大夫監―田舎者の滑稽 老人たち 学者たち

三 引歌・引詩の技法……………112

引歌の成立する社会 多様な技法 成功と失敗と 引歌の変形

四 愛のかたち ――「もののまぎれ」の実体……………130

「もののまぎれ」の語義 情交の描写 女三の宮・柏木事件

「一部の大事」、藤壺事件 その用語について

五 宮廷行事の役割 ――行幸について……………149

年中行事の文芸性 王朝物語の行幸 源氏物語の行幸

六 「蛩」巻の物語論……………167

正史と物語 「まじこと」と「そらごと」 正史への不信

「そらごと」の効用 「そらごと」と文芸

七 女三の宮物語の発端……………184

多数派、空蟬型の発端 源氏物語以後の物語の発端

「若菜上」巻の冒頭 婚姻令との関わり

八 「雲隠」巻の謎	202
-----------	-----

本文のない物語 原作はあったか、なかったか 雲隠れの意味

「雲隠」巻の誕生

九 宇治の大君の死	218
-----------	-----

自死の決意とその実行 平安時代の自死 自死の罪業観

十 従者たちの役割	237
-----------	-----

源氏以前の従者たち 惟光と良清 従者たちの変貌—宇治十帖

十一 「夢浮橋」巻の結末	254
--------------	-----

完結か未完結か 「夢浮橋」と愛の不安 母性への帰依

あとがき	267
------	-----

源氏物語主要人物系図	270
------------	-----

源氏物語の世界



はじめに

我々日本人は、今はたして我々自身の文化について十分に語る資格があるのか。——戦後五十年たつて、こういう懷疑にとらわれる人は少なくないだろう。超高層ビルのオフィスにも、六畳二間のマンションの生活にも、先端に行くテクノロジーにも、また昔日の面影を失った農村にも絶望した人々は、いったい何を心の拠り所とすればよいのか。

この問題はあまりに今日的過ぎて、当面の『源氏物語』とは何の関係もなさそうに見える。『源氏物語』が現代の日本人のこうした文化的飢渴をどこまで癒^いしてくれるものか、それは疑わしい。文化を支える条件が、それを生み出した一千年前と今とは全く違っているからだ。この物語に登場する人々は、我々に生きる指針を直接与えてくれそうには思えない。

しかし、一方、敗戦この方、『源氏物語』は常に世間で何かと話題になりつづけてきた。映画・演劇・翻訳本・アニメ・漫画等々あらゆる分野において、時にはブームと呼ばれるほどの現象までもないながら、現在に至っている。

その理由はいろいろだろうが、しかし最も重要なことは、この作品は千年前から今日まで常にそうでありつづけてきたし、今日の現象にもわかな出来事ではなく、その自然な延長にすぎないということである。もちろん千年という長い年月の間には、この物語にも受難の時期がたびたびあっ

た。儒教が幅をきかした江戸時代には、『源氏物語』は淫乱をそそのかす書物として散々悪口を言われたし、つい五十年前の敗戦以前までは、これまた皇室に不敬を犯したといつて、軍部から非国民呼ばわりを受けた。しかし、その間にも読者はいつも大勢いたのであり、熱心な読者たちは、あるいは明日の命も知れぬ戦乱の巷ちまたの中で、あるいは深山の僧坊で、また薄暗い女部屋で、この五十四帖にのぼる長編を飽きもせずに筆で写して、次の時代の人々へそれを受け渡していったのである、『源氏物語』はこうして今日まではほぼ無傷で伝えられてきた。その時々^にに現れた野蛮な権力者の力も到底読者たちからその愛読書を取り上げることとはできなかったのである。

『源氏物語』はいっさいの理屈を越えて面白い。要するに大切なことはそれだけだ。ただもうひどく面白いだけのものは、時代がどう動こうと変りようがないだろう。

それでは、どこが面白いのか。その説明がまた難しい。世間で面白いといわれる人について、その面白さを説明するのと同じだ。本人に会ってごらんさない、というのが最も正しい答えであろう。ただ、その面白さは、時代を超え、社会の変容を超えて、いわば普遍的な人間の知恵や感情に深くかかわるものだといえるだろう。すぐれた古典は、洋の東西を問わず、人間性の奥深くまで錘おもりを下ろすものだという。『源氏物語』を成り立たせた社会は、時間とともに激しい変容を受けながら、作品の生命を成すところには、その間微塵の動揺もなかった。

いわゆる古文化財というものがあり、一定の保護が加えられている。しかし、それらは国宝とされるような物は別としても、我々の周囲を見回して、たとえば建築物など、二百年以上前に建てら

れたものはごく少ないことに誰しも気付かされるだろう。遠い時代の息吹をまざまざと再現するようなものは、今の世の中にはほとんど遺されていない。

しかし、文学作品は例外である。人の心の中までもこまごまと語り明かしてくれるものは、それ以外にはない。『源氏物語』はその古典の最高傑作であり、常にごく身近な手の届くところにある。こうして好きな時に自由にこの作品に接することができる。これは、我々日本人にとってまさに至福といわねばならない。

ところで、実は『源氏物語』は今日ではもはや日本人だけのものではない。それは広く世界の古典であり、不滅の人類の財宝となっている。その翻訳は既に数か国語に及び、しばしば『源氏物語』をテーマとした研究集会が世界のどこかで開かれている。アーサー・ウェーリー氏の翻訳がイギリス人を驚かせてから約六十年、日本はその間に世界の孤児となり、凶悪な犯罪者として恥多き苦難の道を歩いてきた。今日、経済大国を実現したといっても、なお国際的にはかつての暗い影をひきずったままなのだ。その中で、『源氏物語』は、世界の人々の日本人論の構築のために、現在どのような役割を果たしているものか、もちろん私にもよくは分らないが、かつて浮世絵がマチスやゴッホたちに影響を与えたように、『源氏物語』は、世界の人々が日本人の心の中核にフジヤマやゲイシャガールとは違った面での何があるかを理解するうえで有力な助けになっているだろう。それは、場当りの外交や、見え透いた金銭の援助にはるかに優るものであろう。もちろん、それは日本人のためだけではなく、ややおおげさにいえば、世界の平和と幸福のためでもある。

しかし、『源氏物語』がそのような高い評価を受けている理由は、たとえば古代人の遺跡を前にした時のように、人々がそのことを知識として他から教えられたからではない。それはひたすら具體的な各個人個人の体験そのものに属することである。人々はめいめい自分で文字を追ひ、または声をあげて読み、あるいは聴き取ることによって、しだいに物語の世界に進み入り、その内容の面白さや微妙な味わい、複雑な彩りに魅了されつつその間に物語の世界を追体験する、それが、この物語の作品としての存在を支える唯一の行為なのである。その意味で、とやかくの説明の前に、まず物語全体のごくあらましを記しておこう。なお、五十四帖の巻々の名称などについての詳しいことは後に述べる。

あらすじ

第一部（桐壺・藤裏葉） 身分の低い桐壺更衣は、帝の寵愛を得て、世にも美しい皇子を産むが、やがて周囲の女たちに妬まれて病の果てに死ぬ。

皇子は成長するにつれて、類ない美貌と才能を具えてゆき、光源氏と称される。そのころ亡き更衣が忘れられない帝は、彼女に似た先帝の姫宮藤壺を迎える。母恋しい少年光源氏は、藤壺によくなつた。

やがて彼は元服し、左大臣の娘葵の上が正妻と決るが、彼女は光源氏より年長で、つんとすまし

た冷たさに彼はなじめない。というのも、そのころ藤壺への感情が、亡き母恋しさからせつない異性への思慕に変わって、人知れず胸の奥に燃え続けていたからだった。

十七歳の夏、長雨の一夜、親しい友人たちが宮中の宿直のひまに語り合う女性の経験談に心をそそられた光源氏は、翌日、方違えに宿を借りた紀伊守の邸で、老地方官の後妻空蟬に忍んでかりそめの契りを結ぶ。匂うような若さでやわらかくやさしく迫る源氏に、空蟬は身を委せるが、人妻としての自覚からそれ以後は源氏への思慕を制して、忘れかねる男の求めにも二度と応じようとはしなかった。

同じころ、源氏は、五条の町の行きずりに、垣根の夕顔の花を手折ったのが縁となって、その家の主夕顔の女と結ばれる。その花のようにあどけなくはかなげな女は、身許も明かさぬままに、男の胸にうっとり抱かれる。魅せられた源氏は、八月十六日の夜、女を近くの某の院に連れ出すが、その翌晩、突然闇の闇に現れたあやしい物の怪に、夕顔ははかなく命を失う。悲しみのために、源氏は病床にその冬を過した。

明るる春、病氣加療のまじないに北山へ出かけた源氏は、僧坊の垣根越しに、祖母と住む童女を見て、清純な美しさに強く惹かれる。やがて童女が藤壺の姪と分ると、源氏はむりやりに自分の邸に連れ去ってしまう。

童女は源氏に育てられ、やがて彼の妻となる。後の紫の上である。

このころ、源氏と藤壺中宮とは、すでに不倫の一線を越えてしまっていた。彼の胤を宿した藤壺

は罪の子（後の冷泉帝^{れいぜい}）を産む。二人の恋は宿命的で、底知れず暗かった。

何も知らずに、若宮が源氏の幼顔^{わきながお}そっくりだと喜ばれる父帝の前に、源氏も藤壺も心はおののき、顔色も変わるのであった。

しかし、源氏の恋の遍歴には、とんだ失敗もあった。今は落ちぶれた故常陸宮^{ひたののみや}の姫君末摘花^{すえつひな}の噂を聞くと胸おどらせ、苦心のあげくやっとの思いで逢ってみると、痩せこけて、青白い馬面^{うまづら}に、長々と伸びた鼻の頭だけが赤く色づいている。話しかけてもはにかんでいるばかり。しっぽを巻いて逃げ出しながらも、源氏は同情して、後々までその生活の面倒を見た。

夕顔の女との出会いがあったころ、源氏は前皇太子の未亡人の六条御息所^{ろくじょうのみやすどころ}のもとに通っていた。教養に富み気品の高い女性であるが、その近寄りがたいほどの立派さが、源氏より七歳年長のせいもあって、近ごろでは逢えば肩のこる存在になってきている。夕顔の女を取り殺した物の怪^{ものけ}に、この御息所の面影がちらついたのは明らかだし、その後、葵の上が懷妊すると不思議なことが次々と起る。葵の上にとりついた物の怪調伏^{かじきとうふ}の加持祈禱^{かじきとう}の折に、葵の上の様子がにわかに変わると、恐ろしい呪いの声をあげた。その声は御息所そっくりであった。また一方、御息所のほうでも、うたたねの夢に、いつしか邸をさまよい出て、美しい姫君の枕もとに座りこむと、やにわにその人を打ち叩くと見た。ふと気がつけば、己^{おのれ}の袖には祈禱^{いのれ}の護摩^{ごま}の香が強くしみている。思いもかけぬわが内心、怨念^{おんねん}の何というあさましさ、ただでさえ足遠くなりがちの源氏がこの噂を耳にしたら、さぞやと、御息所の苦悩は深いのであった。

御息所は、斎宮となった娘に同行して伊勢に下ることを決意し、嵯峨の野宮を訪れた源氏と別れを惜しんで、遠く京を去っていった。

こうしたなかで、春の花の宴のあと、酔いのまぎれに、行きあわせた臙月夜の女と関係ができる。彼女は今を時めく右大臣の第六女、あの桐壺更衣にさんざん意地悪をした弘徽殿大后の妹である。無理な逢引が重なって、とうとう事が露見し厄介なことになった。源氏は、右大臣にとって政敵の左大臣の婿である。もっけの幸い、これを口実に源氏を陥れようとの気配が濃くなる。危険を察した源氏は自ら都を出て、須磨へ逃れる。

さびしい須磨の浦での一年がたち、翌年明石へ移った源氏は、その地の豪族の娘明石の君を得、やがて罪を許されて帰京する。不遇の間に源氏の人柄も円熟を加えていた。

翌年、御代が代って冷泉帝が即位する。冷泉帝の母は藤壺で、実は源氏の罪の子である。帝の事実上の父親として、源氏には栄華の道がひらけてきた。亡き母の里邸だった二条院の修築から、さらに今は亡き六条御息所の旧邸を大改築した六条院に、源氏は関係のあるすべての女性を集めて、四季の風雅を尽くさせる。

六条院の花形は玉鬘である。彼女は夕顔の遺児で、実父は頭中将である。幼時乳母に連れられて筑紫へ下り、成人の後に土豪の求婚を逃れて京に上り、やがて源氏に見出されて養女に迎えられたのである。彼女にあこがれて六条院には多くの貴公子たちが集るが、その中で皮肉にもいちばん嫌っていた武骨な鬘黒大将の手に落ちる。

光源氏三十九歳、その長男夕霧も、長年の思いがかなって、たけくらべの恋仲だった雲居雁とめでたく結婚にこぎつけた。娘の明石の姫君も東宮に入内し、冷泉帝と源氏の兄朱雀院と、お揃いの行幸を迎えた六条院は、榮華の極点に輝き満ちていた。

第二部（若菜上・幻） 朱雀院には年若い姫君女三の宮があった。院は出家の後が心配で、弟の源氏にその後見を頼む。源氏は宮を引き受け、正妻として迎える。しかし、宮は幼稚で無邪気さのほかに何のとりえもない女であった。紫の上は平静を装っているが、源氏に対する信頼も崩れ、心の傷は深かった。源氏もまた軽はずみな行為を悔い、宮の扱いも人前だけとなりがちだった。かねて宮に心を寄せていた青年柏木は、その噂に心は静まらず、ある春の日の蹴鞠の折に宮の姿をかいま見て以来、狂おしい恋のとりことなってしまう。

四年の歳月が過ぎた。心痛の紫の上は重い病に臥した。人々がその看護に手をとられている隙に、柏木はついに女三の宮に近づき、宮はみごもる。源氏は間もなくこの秘密を知る。怒りと苦しみの中で、しかしそれは、かつて彼自身が継母の藤壺中宮との間に犯した罪の報いとも観じられた。生れた幼児薫を黙って腕に抱く彼の胸は、やはり屈辱の思いに苛立つのである。酒席に顔を見せた柏木に向って、

衛門督（柏木）

心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとて、いましばしならん。

さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり。（若菜下）

と鋭い皮肉を浴びせざま、じろりと柏木の顔を見る。犯した罪におののく柏木は病床に倒れて、や